

磨いて伝えるには最低3年は要ります。この準備をしないと、イベント頼みになってしまいます。2つ目は、市と市だけでなく、もっと生活の基底にあるコミュニティー同士がつながる仕組みをぜひ取り入れてほしいと思います。このつなぎ方をどのようにするかということが極めて重要になると思います。さらに、今までの経験者が入って次の都市につないでいかないと、単発事業で終わってしまう可能性があると思います。これが一番申し上げたかったことです。こういった文化イベントにかかわるアーティストあるいはサポーターが、今後グローバル化の中で生きていく、どのようにつなげていくかということが大きな鍵になりますので、そこに目をつけていただきたいと思います。

太下 東アジア文化都市ができる前の構想段階からかかわっておられる佐々木先生、いかがでしょうか。いかに持続させていくべきか、この仕組みについてご意見をいただきたいと思います。

佐々木 寧波市から東アジア文化都市連盟創設の提案がありました。これは大変興味深い提案だと思います。東アジアの3か国の間には、EUのような、まとまった政治体が今のところないわけですが、したがって、将来的にアジアにおいてもEUのような国家を超える政治体制が展望されてきます。この流れと、文化を通じて都市がダイナミックに交流を進めるという流れがあります。この2つの流れの中で、我々はどのようにうまくバランスをとっていくかが大切で、これについて研究していくことは大賛成です。例えば、日中韓文化大臣会合の下に「推進委員会」のような会合を設置して検討を進めるのがよいのではないかと思います。

太下 ここで仲川市長から、今までの議論を聞いての感想と、奈良市長の立場としての総括をお願いします。

仲川 歴史都市で、このような文化事業を行うことの意義というのは、未来に向けて歴史を継承していくための原動力や推進力を、いかに確保していくかが重要だと思います。それぞれのまちが持つ今までの歴史的な経緯やさまざまな文化遺産や資源というものを、現代の我々がどのように解釈し、未来に向けて位置づけていくのか、その捉え方を問われているように感じます。

この奈良の役割や価値の一つとして、多様性と包摂性があります。奈良時代や平城京の思想の根幹には、世界とつながっていこうとする部分があります。そこでは当然、異文化と出会うわけで、それをどのように乗り越え、時には取り込んでいくのかという、いわゆる多様性と包摂性に行き当たるかと思っています。

もう一つ、特に創造性と変革性がまちづくりの視点においては非常に重要だと思います。特に世界遺産のあるまちは、どうしても保存に重きを置きがちですが、活用のシーンをどのように生み出していかかが大変重要だと思います。そのまちが持っている“今ある価値”と、その価値をもとにした“これからの価値”の両方を見ていくことが重要だと思います。

太下 最後に登壇者の皆さんから一言、これからの東アジア文化都市、そして日中韓3か国の文化交流に向けてメッセージをいただ

きたいと思います。

万 頻繁に行き来して、ともに進歩を遂げていきましょう。

全 韓中日が東アジア文化都市の交流を通じ、世界の中心となる一つの軸になればと思います。

北川 若者がそれぞれの場所で事業に協働して取り組む、このような仕組みをつくっていくと、彼らが非常に元気になっていき、将来的に希望が持てると思います。

佐々木 東南アジアにもASEANの創造都市ネットワーク等があります。そういった意味で、アジア全体に向けたさらなる展開を、例えば2020年ぐらいを目途に広げていくのが、よいのではないかと考えています。

仲川 このプロジェクト自体がワーク・イン・プログレスというか、やりながら成長しているような気もします。今後も継続的にかかわり、事業を展開していきたいと思っています。特に奈良は、中韓とのかかわりの中で誕生した都市でもあり、これからも主体的な責任と役割を持って、文化の力で3か国、東アジアの発展に貢献していきたいと思っています。

太下 先ほど佐々木先生から、2020年を目途にというご意見もいただきました。2020年は日本におけるオリンピックの開催年であり、日本全国さまざまな場所で文化プログラムも実施されていくことになります。この動きに合わせて、東アジア文化都市というものを考えていくのも一つのいい機会かもしれません。実は、2020年にはもう一つ別の大きな意味があります。マゼランが、この東アジアの海に「平和の海」という意味で太平洋と名づけたのが1520年。2020年はそこから500年という非常に大きな節目の年になります。この東アジア文化都市という事業も、日中韓3か国が文化交流を通じて東アジアの平和を実現しようという事業ですので、2020年を節目に東アジア文化都市をもう一度見直すということは、非常に意義のあることになると思います。



基幹事業

古都祝奈良 事業概要	32
美術部門	34
舞台芸術部門	54
食部門	62

ことほぐなら 古都祝奈良 事業概要

「東アジア文化都市2016奈良市」のコア期間プログラムとして「古都祝奈良 — 時空を超えたアートの祭典」を開催しました。古都奈良を象徴する社寺や江戸後期からの伝統的なまちなみが残るならまち、平城宮跡等を舞台に、「美術」、「舞台芸術」、「食」の3つの基幹事業を中心にさまざまなプログラムを51日間にわたり展開しました。

開催概要

名称:古都祝奈良 — 時空を超えたアートの祭典
期間:2016年9月3日(土)~10月23日(日)
会場:東大寺、春日大社、興福寺、元興寺、大安寺、薬師寺、唐招提寺、西大寺、ならまち、平城宮跡、なら100年会館等

古都祝奈良 — 名前に込めた思い

「ことほぐ」とは、本来「言祝ぐ」または「寿ぐ」と書き、祝いの言葉を述べる意味です。「東アジア文化都市」事業によってもたらされる日中韓各都市の友好を、さまざまな形で祝福し、歓迎したいという気持ちを込め、「東アジア文化都市2016奈良市」のコア期間名称としています。世界文化遺産である社寺等を舞台に展開する「古都祝奈良」では、多様多層な人々が交錯し、交流する日本史上もっとも開かれた都市であった古都奈良の魅力を芸術によって明らかにし、寿ごうとするものです。

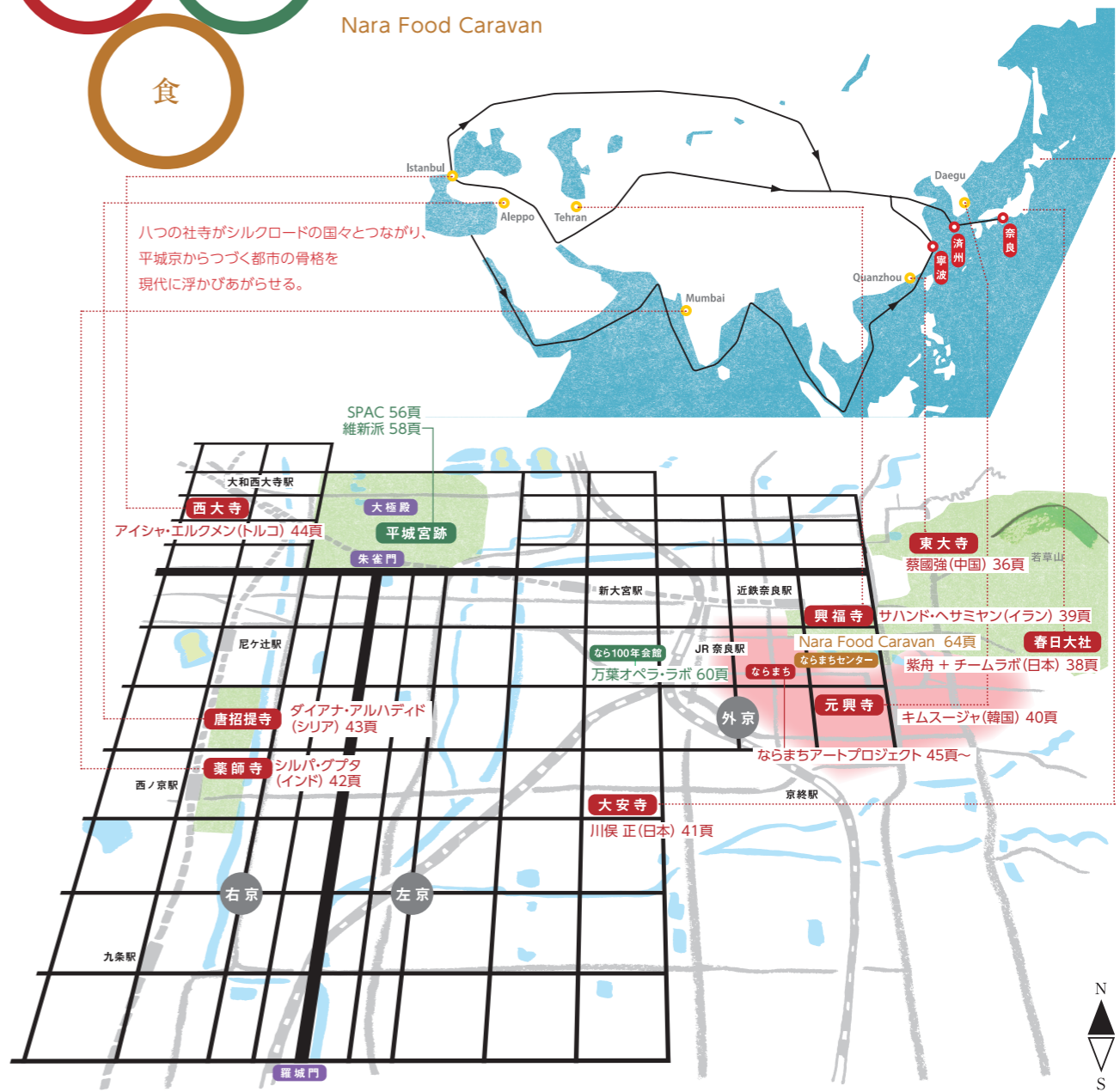
ことほぐなら 古都祝奈良

時空を超えたアートの祭典
ART CELEBRATION IN NARA
BEYOND TIME AND SPACE

時空を超える奈良の旅へ誘う 3つの事業



八社寺アートプロジェクト
ならまちアートプロジェクト
平城宮跡野外公演
万葉オペラ公演
Nara Food Caravan



美術部門

奈良は、1300年前に古代日本の首都として成立した平城京を基盤に、さまざまな時代の歴史が刻みこまれている都市です。特に平城京の時代は、大陸との使者の往来を通じて地中海世界やアジア全域からの文物が流れこむ開かれた国際性をもつ場所でした。そのなかで社寺は、仏教とともに伝来した技術や思想、社会システムを日本が身体化するための拠点であり、その後の時代も学問と宗教のまち南都の中心として、あるいは観光のシンボルとして、常に奈良の骨格をなしてきました。

また、社寺とともに発展してきた「ならまち」では、室町時代以降、産業・商業を中心に栄え、江戸時代にかけて酒・墨・晒・団扇など奈良を代表する産業が発展しました。往時の町並みを色濃く残しつつ、今なお奈良の生活・文化の中心地であるならまちは、都市の歴史の懐深さを感じさせるエリアです。

美術部門は、こうした奈良の「場の力」とアーティストとの真剣勝負となりました。八社寺には日本をはじめ、トルコ、シリア、イラン、インド、中国、韓国とそれぞれ日本への文化の伝播にかかわりのあった地域に生まれたアーティストたちが参加し、ならまちには、日本期待のアーティストたちが作品を展開しました。

アーティストたちは、それぞれの場の時代、文明の断層を見せつつ、今我々が生きている世界を映しこんだ作品を制作してくれました。

また、本事業の開幕から閉幕まで、ほぼ1年を通して東大寺で展開された蔡國強氏の“船をつくる”プロジェクトは、1300年の時空を超える雄大な歴史に思いをはせる、「東アジア文化都市2016奈良市」の主旨を体現したシンボルアートになりました。

本プロジェクト実現のために、尽力してくださった社寺、アーティスト、サポーターなど、すべての皆さまに感謝申し上げます。

美術部門ディレクター 株式会社 アートフロントギャラリー

Profile

株式会社 アートフロントギャラリー

北川フラムが代表を務める美術・文化全般にかかわる会社。「大地の芸術祭 越後妻有アートトリエンナーレ」(新潟県十日町市・津南町)、「瀬戸内国際芸術祭」(香川県・岡山県)などの地域づくりにかかわるアートプロジェクト、美術館・文化施設の企画運営、コミッションワーク、ギャラリー、文化プログラムのプロデュースなど、美術にかかわる事業全般を行っている。作品の持つ時代精神、未来への予感に寄り添い、美術を広く国際的な観点で捉え、深く社会的な場で展開することを目的としている。



*

八社寺アートプロジェクト

2016年9月3日(土)～10月23日(日)

日本史上もっとも開かれた国際的な時代の象徴でもある市内の社寺において、日本に文化の伝播をもたらした国々の第一線で活躍するアーティストによるアートインスタレーションを実施しました。

東大寺 蔡國強

国の総力を挙げた事業により造られた盧舎那仏坐像(大仏・国宝)や世界最大級の木造建築である金堂(大仏殿・国宝)などで知られる東大寺。鎌倉時代に中国の技術により復興された南大門と大仏殿の間にある鏡池を東アジアの海と見立て、作品を展示。(▶36頁)



春日大社 紫舟+チームラボ

2016年、20年に一度の社殿の修築大事業、第六十次式年造替が執り行われた春日大社。3月の春日祭の折に御本殿での勅使参向之儀に先立つ「着到之儀」が行われる建物「着到殿」(重要文化財)に作品を展示。(▶38頁)



Photo: 桑原英文

興福寺 サハンド・ヘサミヤン

669年に建立された山階寺を起源とする興福寺。鎌倉時代再建の北円堂・三重塔、室町時代再建の東金堂・五重塔など、国宝建造物や優れた仏像の数々が安置されている。三重塔前に作品を展示。(▶39頁)



元興寺 キムスージャ

6世紀創建の日本最古の寺として知られる飛鳥寺が平城遷都にともなって移された元興寺。本堂・禅室(ともに国宝)には、飛鳥時代の瓦が今も使われていることで有名。作品は小子坊(県指定有形文化財)の座敷と石舞台の2か所に展示。(▶40頁)



大安寺 川俣 正

聖徳太子が創建した熊凝道場を起源とする、官寺筆頭の「大寺」であった大官大寺が平城遷都にともなって移された大安寺。盛時には南大寺とも呼ばれ、887名の学侶を擁する総合大学として大規模な伽藍を所有。水田の中に残る塔跡周辺に作品を展示。(▶41頁)



薬師寺 シルパ・グプタ

天武天皇が皇后(のちの持統天皇)の病氣平癒を祈願して建立された薬師寺。白鳳様式で建てられた奈良時代の東塔(国宝・解体修理中)のほか鎌倉時代再建の東院堂(国宝)がある。地藏院前に作品を展示。(▶42頁)



唐招提寺 ダイアナ・アルハデド

戒律を学ぶ寺院として唐僧の鑑真和上が創建した唐招提寺。金堂(国宝)をはじめとする奈良時代の建物が残る伽藍は、天平の息吹を伝える。作品は、和上の渡海を助けた竜神が棲むとされる池で展示。(▶43頁)



西大寺 アイシャ・エルクメン

称徳天皇の発願により創建された西大寺。奈良時代には東大寺とならぶ壮大な伽藍を構えていたが、度重なる火災によりその多くが失われ、現在は江戸中期以降の伽藍が残っている。奈良時代に西塔が建っていた地にある茶室六窓庵と池の周辺に作品を展示。(▶44頁)





東大寺 蔡國強

“船をつくる”プロジェクト

展示期間:2016年3月26日(土)~12月20日(火)

展示場所:大仏殿参道脇・鏡池

Profile

蔡國強(Cai Guo-Qiang 中国)

1957年、福建省泉州生まれ。ニューヨークを拠点に活動。1999年、ヴェネツィア・ビエンナーレ金獅子賞受賞。グッゲンハイム美術館(ニューヨーク)、アラブ近代美術館(ドーハ)など世界各地で大規模な個展を開催。2008年の北京夏季オリンピックでは開閉会式で花火を用いた空間演出を行った。東洋思想と現代の社会問題を重ね、場に特有の文化と歴史を活かしたダイナミックな作風で知られる。



Cai Guo-Qiang, Saudi Arabia, 2013
Photo by Shu-Wen Lin, courtesy Cai Studio

作品概要／「東アジア文化都市2016奈良市」開幕の3月26日から閉幕までの約1年間、木製の帆船をつくるプロセスの公開と完成船の展示をしました。帆船は、かつて東シナ海を航行していた中国伝統のもので、中国から木材とともに船大工10人が来日し、鏡池のほとりで全長13メートルの船を約3週間かけて公開制作しました。「東アジアの人々が同じ船に乗り、未来に向けた航海へと出発する」というコンセプトのもと、創建以来、常に大陸伝来の思想や知識を受け容れ、国際的な協力のセンターであり続けた東大寺の鏡池を海と見立てて船を浮かべました。さまざまな問題乗り越え、平和で豊かな東アジアの未来を希求する「東アジア文化都市」の目標と響き合う、本事業のシンボルプロジェクトとなりました。

作家メッセージ／奈良に初めて来た時は懐かしい気がしました。それはお寺を見てもどこか、中国的な雰囲気があるからです。「この時、この土地、アート of 歴史に照らし、自分に対し、何を一番見たいか」を問うと、東大寺で「船をつくる」とことだと思いました。船は、海を介して互いの文化が浸透し、影響し続けてきた東アジアの国々が共有する文化遺産であり、東アジア文化交流の象徴です。同時に、万人を乗せて荒海を進む船は、大乘仏教の精神を反映しています。遣唐使船や鑑真さんがいらした船など、仏教も文化も船で奈良に運ばれてきました。国と国の間には、さまざまな問題がありますが、アートはそれを超えなければならないと思います。“船をつくる”プロジェクトは、「私たちはともにひとつの船に乗って、もう一度この水域を帆走できるだろうか?」という問いを提起しています。

東大寺 蔡國強 “船をつくる”プロジェクト



コンテナで中国から資材が到着



事前制作を開始



船の骨格が見え始める



板を曲げて船の形を決める



3月26日 参道脇で公開制作開始



約800mの距離を約2時間かけて慎重に移動



公開制作の会場へ搬出開始



たくさんの参拝客に見守られながらの作業



マストを立てる



マストを船に固定し、完成間近



ついに完成



鏡池に進水



クレーンで慎重に吊り上げる



鏡池への進水を待つ



Profile

サハド・ヘサミヤン(イラン)

1977年、テヘラン生まれ。テヘランを拠点に活動。2015年ヴェネツィア・ビエンナーレにイラン代表として参加。東アジアでの作品発表は今回が初めてとなる。イスラム建築から影響を受けた反復する形、シンメトリーな構造を大胆に拡張した作品を制作。



photography by Hamid Eskandari

作品概要／三重塔の前、南円堂脇(猿沢池側)に蓮の花をモチーフにした対の彫刻を設置しました。シルクロードを介してインド、エジプト、イラン(ペルシャ)などさまざまな地域で根付き、日本へは仏教とともに中国から伝播した蓮を、イスラム美術の反復と増殖、西洋美術の構築要素を融合させて表現しました。完成した彫刻は、ステンレスと幾何学の持つ素材の固さとは対照的に、蕾の先が金色に輝き、今にも咲きそうな陰影の美しい柔らかな作品となりました。

作家メッセージ／私は、蓮の花をモチーフとして選びました。これは我々の文化でも、日本の文化でも使われるものだからです。イスラムのオーナメントやモスクなどの建物に装飾で使われている蓮のデザインなどをモチーフのヒントにしました。そして彫刻のデザインは、美しい興福寺の景観の一部になるように、できるだけ周辺になじむような形を思い描き、今開かんとする蓮の花を表現しました。英語の作品タイトル[Forough : Brightness]の「Forough」とはイランの言葉で「悟り」を意味しています。またこの蓮の花は、今にも開こうとしているようにも、また日が上がってくるころにも似ており、見る時の時間帯や見る人の状態によって、さまざまに想像してもらえる作品になればと思いました。

興福寺 サハド・ヘサミヤン

開花

展示場所:三重塔前



春日大社 紫舟+チームラボ

まだ かみさまが いたるところにいたころの ものがたり

展示場所:着到殿

Profile

紫舟(シシュー 日本)

書を伝統から解放し、書=平面という常識を超えた「書の彫刻」を制作。2014年カルーゼル・デュ・ルーブル(パリ)フランス国民美術協会展で金賞受賞。翌年の同展で主賓招待作家としてエントランスホールで作品を展開。2015年ミラノ国際博覧会日本館エントランス空間のアート担当。



©masaaki miyazawa

チームラボ(日本)

プログラマー、エンジニア、CGアニメーター、絵師、数学者、建築家、ウェブデザイナー、グラフィックデザイナー、編集者など、デジタル社会のさまざまな分野のスペシャリストから構成されているウルトラテクノロジスト集団。アート、サイエンス、テクノロジー、クリエイティビティの境界を越えて、集団的創造をコンセプトに活動している。



作品概要／着到殿で壁に映像を投影するインタラクティブアートを展開しました。春日大社にふさわしい太古の神々の世界を彷彿させる映像に象形文字が投影され、鑑賞者が文字に触れるとそれが意味する絵へと姿を変えます。「鳥」は「木」の枝にとまり、「雨」が降ると「土」からは命が芽吹くというように、絵は知能を持ち、自由にかかわり合います。さらに絵は鑑賞者にも反応し、「牛」は角を鑑賞者に向けて威嚇し、「羊」はダンスをします。全てが互いに関係し合う自然界のように、本作でも人と生き物が相互作用を与え合う未来の物語を展開しました。

作家メッセージ／春日大社では、漢字の始まりである象形文字を用いました。「御造替」の書を担当させていただいた時に春日大社について多くを学び、その中でも「当時の最先端は物質ではなく、恐らく思想だった」ということを、最も強く感じました。当時の最先端テクノロジーは、生き抜く技だったのでしょうか。そのことから、現在の最先端のテクノロジーを用いて、象形文字に触れるとその意味のアニメーションに変化する作品を制作しようと考えました。文字がアニメーションに変化するだけでなく、アニメーションそれぞれが知能を持って相互にかかわり合い、その時にしか生まれ得ない物語を繰り広げます。



〈演繹的なもの(石舞台)〉

大安寺 川俣 正

足場の塔

展示場所:旧境内 塔跡



*

Profile

川俣 正(かわまた ただし 日本)

1953年、北海道三笠市生まれ。パリ在住。フランス国立高等美術学校教授。1982年ヴェネツィア・ビエンナーレ、以後ドクメンタ(カッセル)などのアートフェスティバルに多数参加。1999—2005年東京藝術大学先端芸術表現科主任教授、2005年横浜トリエンナーレ総合ディレクターなどを務める。建築や都市計画、歴史学や社会学、日常のコミュニケーション、医療にまでかかわるプロジェクトを世界各地で展開。

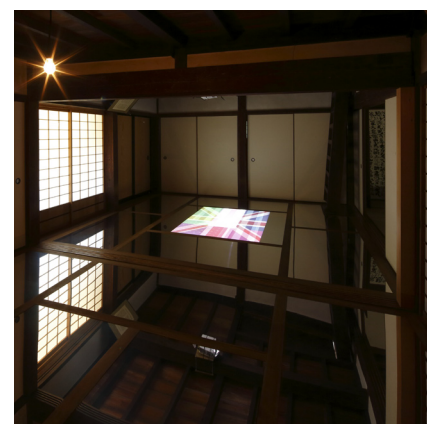


作品概要／東西に巨大な七重塔があったとされる塔跡隣地で作品を制作しました。文化財の修復等で伝え受け継がれてきた丸太足場の技術を活用し、吉野杉の丸太約1500本を用いて、かつての塔を彷彿させる高さ約25メートルの足場の塔を出現させました。足場職人だけではなく、フランスや韓国の学生、国際ボランティアも参加し、多言語が飛び交い互いの知恵を共有する制作風景は、平城京を代表する大寺院であった大安寺が国際的な学びの場であったことを再現しました。

作家メッセージ／大安寺は多いときは800人以上の僧侶がいて、いろんな外国の人が来て、さまざまなことを勉強していました。1300年前の大安寺は非常に国際的な場であったことは確かだと思います。そこから当時あったという巨大な塔の幻を共有したいと考えました。私はたまたま現在、フランスのパリの美術学校で教えているので、フランスから5〜6人学生を連れてきて、国際ボランティアの方にも参加してもらい、いろんな国の言葉で賑やかに作品を作りました。足場を組んだ内側は、太古の塔のイメージを感じられるようにしました。

元興寺 キムスージャ

演繹的なもの／息をつくために一国旗



*

〈息をつくために一国旗(小子坊)〉

Profile

キムスージャ(韓国)

1957年、大邱生まれ。ニューヨーク、パリ、ソウルを拠点に活動。1999、2001、2005、2007年ヴェネツィア・ビエンナーレをはじめ、世界各地の美術館で作品を発表。韓国を代表する現代美術作家。朝鮮半島の伝統的な布や裁縫をテーマとした作品をはじめ、自らのルーツを出発点に、遠く隔たった世界の文化や社会との出会い、複雑さを表現する作品を展開。

photography by Bryan Thatcher,
Courtesy of More Art and Kimsoo ja Studio



作品概要／小子坊(県指定有形文化財)屋内と、屋外の石舞台の2か所に作品を展示しました。どちらも鏡を用い、いま私たちが立つ「場所」と、鏡に映り込んだ「もうひとつの場所」を作り出しました。宇宙の始まりから着想を得た石舞台の作品は、漆黒のオブジェが異次元へ開かれた穴のようにも、あるいは全ての始まりの無にも見え、鏡に映る虚像が人々の意識を深淵へと導きます。小子坊では、空間が反転された鏡の床に、246の国旗が移り変わってゆく映像が投影されました。時間が垂直に引き延ばされたかのような空間に、地域の象徴である国旗が曖昧に変化していくさまは、観る者に時空を超えてある何か、を考えさせます。

作家メッセージ／宇宙のはじまりをイメージして、二つの場所にインスタレーションを作りました。アジア各地に伝播する陰と陽の思想や、飛鳥時代から続く長い歴史の中で、元興寺が持つ時間にごだわりました。現在残されている元興寺からかつての大伽藍はなかなか想像できないかもしれませんが、ここにはない風景と今がつながることを考えました。現在見えるものから歴史の中に埋もれて見えなくなったしまったものを連想させる作品です。



*



薬師寺 シルパ・グプタ

光のない影

展示場所:地蔵院前

Profile

シルパ・グプタ(インド)

1976年、ムンバイ生まれ。2009年リヨン・ビエンナーレ、2008年横浜トリエンナーレ、テート・モダン、森美術館、グッゲンハイム美術館などで作品を発表。シンシナティ・アートセンター、アーヘン近代美術館などでの個展多数。人間の知覚と情報が伝達、理解される過程に関心を持ち、多様な媒体による作品を通じて、想像上のものに過ぎない社会的な境界や分離が固定化されている状況に疑問を投げかける。



作品概要／インドから千年を経て日本に伝わり、奈良で花開いた仏教の歴史、伝播、変遷を学ぶ中で見出した「自分自身に向かって歩いていくこと」という思想から作品を構想しました。薄い鉄板を輪郭で切り抜いた8体の彫刻は、設置場所の空間に溶け込み、ふだんは気にとめることがない「見る」という行為を意識させました。人型の頭部は、実際に見ることはできない夢や情熱などがそれぞれ異なる形で表現されています。また、インターネット社会において、作家は作品と鑑賞者の相互作用に着目し、作品が鑑賞者とともに撮影され、どのように変換されていくのか、という現代社会の現象も作品に取り込みました。

作家メッセージ／私は奈良でたくさんの社寺を訪ねました。そして仏教について本を読んで勉強し、研究しました。作品は人の形になっていますが、人の上にはさまざまな形がついています。地図だったり、家だったり、雲だったり人が一体になっています。こういったものが存在していることを我々は知っています。しかし、それに対ししなければ実際に見ることはできません。例えばそれは夢や情熱であったりしますが目には見えません。しかし確実にそこに存在しています。そういったことを表現したいと思いました。

また、奈良では多くの旅行者が写真を撮っていました。「光のない影」というハッシュタグとともに、作品と一緒に写真を撮ってもらえるよう、子ども向けの小さな作品や、さまざまな形のものを作りました。人がこの彫刻とかかわることによって作品が完成するのです。



唐招提寺 ダイアナ・アルハデイド

ユニコーンの逃避行

展示場所:滄海池

Profile

ダイアナ・アルハデイド(シリア)

1981年、アレッポ生まれ。ニューヨーク在住。2015年ヴェネツィア・ビエンナーレ、シャルジャ・ビエンナーレ(アラブ首長国連邦)、ブロンクス美術館(ニューヨーク)、アクロン美術館(オハイオ州)などで作品を発表。日本での作品の発表は今回が初めて。「不可能な建築」をテーマに木材や石膏、金属、ボール紙などの多様な素材を用いた作品を制作。



作品概要／鑑真の旅に象徴されるように、古来、人々は多くの困難を乗り越えながら海や山々を越え、文化を携えて旅をしてきました。そこには既に歴史で語られることのない多くの人々の物語があります。中世のユニコーンのタペストリーをモチーフとした作品は、展示場所である滄海池の竜の物語と、ユニコーンにまつわる物語を重ね合わせることで、人の移動と文化の伝播に思いをはせることを促す作品となりました。一つの物、一人の人間が移動することで、それぞれの土地に根差した物語が生まれることを意味を考えさせます。

作家メッセージ／初めて唐招提寺を訪れたとき、とにかく美しい場所でとても感動しました。また金堂に展示されている乾漆像の制作方法が、私の制作方法と共通点があったことも驚きでした。私はシリアで生まれましたが、成長したのはアメリカです。シルクロードをニューヨークまで引き延ばし、何かニューヨークから物語の中の動物を持ってこようと考え、メトロポリタンミュージアム別館の小さな美術館に飾られているユニコーンのタペストリーを思いつきました。唐招提寺の池は、非常に印象的な場所で、池の中にある小さな島の中央には一本の木が伸びています。この木がタペストリーの構図と非常によく似ていました。また竜の神が住んでいるという伝承がある滄海池で、想像上の動物が2頭同時に存在するというのは、面白いアイデアだと思いました。作品の正面に立つと、パネルのイメージ、自然の花や植物から得たイメージも見ることができます。それを通して奥の景色とユニコーンの角が見えます。



西大寺 アイシャ・エルクメン

池からプールから池へ

展示場所:西塔跡

作品概要／西塔跡の池をシルクロード東端の奈良に見立て、新たに西洋的なプールを制作。プールと池をパイプでつなぎ、池の水を浄化し循環させる装置を制作しました。人工的な直線によって形成されたプールと、自然に溶け込むような曲線と自然素材からなる日本庭園の池は、西洋と東洋の思想の対比を象徴的に表現し、流れる水は東西の文化交流を連想させます。しかし、直線的なプールもまた、そこに生えている木々やその根を避け、自然を傷つけることなく注意深く配置されており、対照的なものの中にも親和性があることを発見できます。

作家メッセージ／視察に訪れた時、生い茂る木々の中の小さな池が私の目を引きました。その小さな池の横には小さな茶室があり、その2つが相互的な関係にあると思いましたが、庭はもはや、その気配をなくしていました。そこで、この空間をきれいにするエコシステム、生態系をつくりたい、そして、お寺との対話を創出したいと思いました。機能性を持った彫刻のような作品、空間とともに機能する作品を作りました。

池の水をポンプで汲み上げて浄化し、プールに入れ、そしてまた池に戻します。水が循環され、池の水を浄化していきます。プールの形は、この空間に制約を受けています。庭の木々やその根を避け、自然を傷つけることなく、自然に合った形です。このプールはこの場と密接に結びついた形になっています。そして、プールにはもう一つの意味があります。お寺の傍に幼稚園がありました。子どもたちが、お寺を訪れ楽しんでくれると思ったのです。

Profile

アイシャ・エルクメン(トルコ)

1949年、イスタンブール生まれ。イスタンブール、ベルリンを拠点に活動。フランクフルト国立美術アカデミー教授。2011年ヴェネツィア・ビエンナーレ、1997年ミュンスター彫刻プロジェクト、イスタンブール・ビエンナーレ、光州ビエンナーレなどの発表多数。

その場所で起きている現象にそって構想した作品を制作。手法や素材にとらわれず、文化の境界を自由に越境する作風で知られる。



ならまちアートプロジェクト

2016年9月3日(土)～10月23日(日)

江戸から明治期の歴史を感じさせる「ならまち」で、アートを鑑賞しながらまちなかを散策できるアートプロジェクトとして、地域の伝承や歴史を活かしたインスタレーションやワークショップ等を行いました。

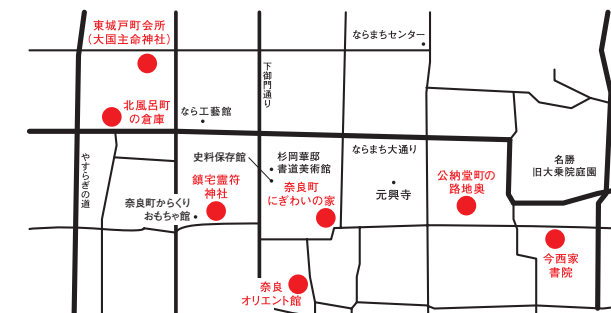


奈良市街地の東南部に位置する「ならまち」は、かつて広大な面積を占めていた元興寺の旧境内を中心に発展した街区です。平城京の「外京」にあたり、当時の道筋をもとに発展した長い歴史を持っています。

平城京から都が遷ったあとは、東大寺や興福寺など大寺院の門前町として、町民が力をつけた近世以降は大和国の産業、商業の中心地として、それぞれの時代に沿って性格を変えながら、ならまちは常にその活力を保ってきました。

現在は、江戸時代から明治にかけての町家の町並みを色濃く残し、世界中から人びとが訪れる観光の名所になっています。同時に奈良市民にとっての大切な生活や憩いの場であり、これからの奈良を元気にするさまざまな活動が生まれつつあるまちでもあります。

本プロジェクトは、このようなまちの歴史や風土、それぞれの場所がもつ多彩な個性を読みこんだアート作品を各所に展示することで、ならまち散策の道しるべの役割も担いました。





北風呂町の倉庫 宮永 愛子

雫 — story of the droplets

作品概要／昔は井戸がたくさんあったという北風呂町に、大正から昭和中期まで使われていた染物屋の元工房があります。作家はこの場所を訪れ、まず空間をみつめるために掃除をはじめたところ、靴の裏が鮮やかに染まっていることに気づき、作品の着想を得ました。床一面に白い布を敷き詰め、倉庫にあった未開封の瓶と同じ量の井戸水を一滴ずつまき、地面の拓本を写し取りました。染め上がった布を下から見上げると、私たちの足元で普段は静かに眠る歴史や記憶が豊かに語り始めてくるようです。

作家メッセージ／通りの喧噪を一本入ると古い木造の染物屋倉庫が現れます。昔はたくさんの竹竿に日々染め上げられた糸が吊るされ、賑やかに仕事をされていたといいます。風を通す鎧張りの壁に囲われたこの建物を初めて訪れた時、染めたての糸が静かに風に揺れる在りし日の光景が、鮮やかに浮かび上がりました。使われなくなって既に何十年も経ったこの空間が、記憶とともに今も大切に残されていました。はじめは高いところばかりを見上げていましたが、靴の裏に見つけた色の痕跡から、ふと足元の地面が見上げてきた物語を探したくなりました。そして未開封のまま、さまざまな出来事と長い時間を片隅で見つめてきたガラス瓶を中央に招こうと考えました。少し眩しそうに話してくれた記憶の物語が、ひと粟ごとに描かれていきました。

Profile

宮永 愛子(みやなが あいこ 日本)

1974年、京都府生まれ。2013年第1回日産アートアワード(BankART Studio NYK)グランプリ受賞。あいちトリエンナーレ2010、ミヅマアートギャラリー、国立国際美術館など個展多数。ナフタリンや塩、陶器の貫入音や葉脈を使ったインスタレーションなど、気配の痕跡を用いて時を視覚化する作品を制作。



photo by MATSUJAGE Courtesy Mizuma Art Gallery



Profile

黒田 大祐(くろだ だいすけ 日本)

1982年、京都府生まれ。広島を拠点に活動。「文明的なもの」と「自然的なもの」の調和と関係性を問う作品を制作。近年は対馬や韓国に滞在してフィールドワークを行い、地勢と文明の関係性をテーマに映像、家電などを用いて動きのあるインスタレーション作品を展開。



東城戸町会所(大國主命神社) 黒田 大祐

地風

作品概要／東城戸町会所は、町の会所であるとともに、大國主命(いわゆる大國さん)が祀られ、町の人々に親しまれています。また、椿井小学校の前身の学舎があったともいわれている場所です。そこにある蚊取り線香や柄杓などの生活備品から、町の人々がならまちについて語る声が聞こえる音の作品を制作。座敷では、海に面していない奈良が、海を介してさまざまな文化を受容し都となった歴史から着想した作品を展示しました。海の映像を背景に、約50台の扇風機を用いて風を吹かせるインスタレーションは、荒海をものともせずに進んだ先人たちへのオマージュであると同時に、歴史に新しい力強い風を吹かせたい、という思いも込められています。

作家メッセージ／会場は大國さんが祀られていて、ならまちの会所の特徴である社寺と集会所が一緒になった典型的な場所です。今は書道教室やお祭りで使われています。奈良になぜ都が置かれたのかを地理的な面から考え、韓国や中国などアジア地域とのつながりを意識して、東城戸町会所の歴史と実際に船に乗って旅をしているイメージを重ねて作品を作りました。扇風機で風を起こすインスタレーションでは、何かすごくきれいな海とか、強い風が吹くとか、圧倒的な自然や事象と対峙したときに、いろんなことを一瞬で忘れてしまうような状況をつくりたいと思いました。





公納堂町の路地奥 西尾 美也

人間の家

作品概要 / 公納堂町のかつて呉服商が営まれていた場所で約20日間におよぶ市民参加型の公開制作を行いました。地域から集めた古着を四角に切り抜いて縫い合わせ、完成したパッチワーク布を、この場所にある古い蔵の形を模した家の形に展示しました。会場は住民や鑑賞者が集う交流の場となり、ワークショップも開催しました。

Profile

西尾 美也 (にしお よしなり 日本)

1982年、奈良県生まれ。奈良県立大学地域創造学部専任講師。2016年あいちトリエンナーレ、さいたまトリエンナーレ、2014年六本木アートナイト等多数のプロジェクトに参加。装いの行為とコミュニケーションの関係性に着目し、地域住民や学生との協働によるプロジェクトを国内外で展開。



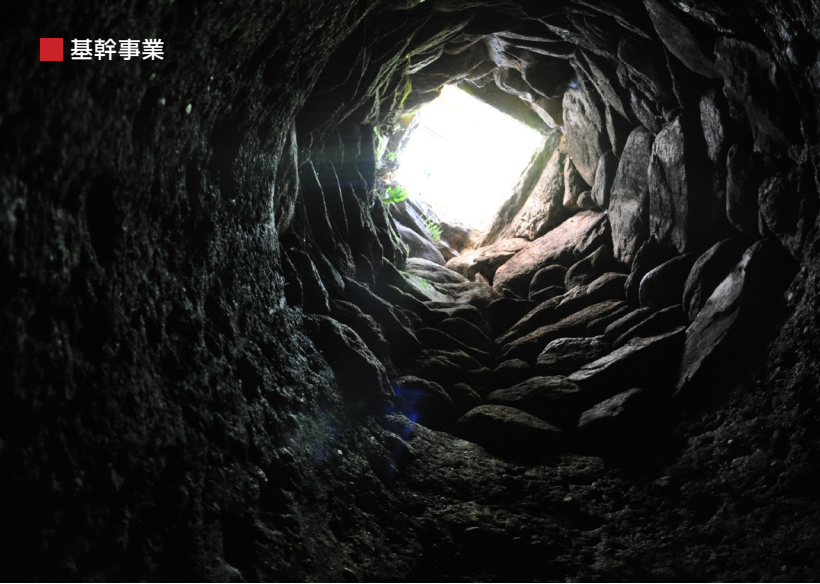
鎮宅霊符神社 西尾 美也

ボタン / 雨

作品概要 / 「人間の家」の制作のために集めた古着から取り外したボタンを、鎮宅霊符神社の参道脇に雨のように展示、奉納しました。かつて陰陽師、当時の暦師が暮らしていたとされる町に建つ鎮宅霊符神社からは北極星が正面に見えます。ボタンを天体/雨のように降らせることで、かつて暦師たちが空を見上げ、天を占っていたことに思いをはせる作品としました。

作家メッセージ / 僕はいつも服を用いた作品づくりをしています。公納堂町の路地奥は、かつて呉服商が営まれていたという場所でしたので、その歴史とも呼応するように、今回はならまちに暮らす方々から要らなくなった古着を募集しました。それを誰もが参加できる公開制作で、炎天下、古着を切り分け、ミシンでどんどんつなぎ合わせていきました。みんなの服で、みんながつくり、みんなが集える場所をつくる、新しい公共空間のようなものをつくれたらと思いました。この家の形は、奥にある蔵の形やサイズを模したもので、この場所のモニュメントになっています。そして、鎮宅霊符神社では古着からボタンだけを採取し、天体や雨に見立て、この場所に奉納するようなことをイメージしました。ボタンを上から垂らすことで、かつて暦師の人たちが空を見上げて考えていたことや、その時間というものに思いをはせていただきたいと思いました。また、この作品は本当にさまざまな人の協力を得て完成しました。奈良の歴史に加えて、今、生きている人たちの着ていた服の記憶や、制作に携わってくださった人たちの記憶が重なった作品になっています。





奈良町にぎわいの家 岡田 一郎／林 和音

FLOW (okada)／FLOW「空気の流れ」(hayashi)

作品概要／1917年築、表屋造の「奈良町にぎわいの家」は、自然と共生し知恵を活かした伝統的なならまちの町家建築。この空間に水と空気の流れを再生させるプロジェクト「FLOW」を実施しました。

岡田は、ならまちには春日山から流れる地下水をくむ井戸が多数あることに興味を抱き、映像や実際の井戸を用いて地下水脈に意識を導く作品を制作。にぎわいの家にある井戸に照明を沈めて井戸の底を照らした作品と、井戸の底から地上を見上げた映像作品、水源である滝の映像作品は、ならまちの人々と密接に結びついてきた地下水脈に思いをはせる作品となりました。

林は、通りから裏庭まで建具を開けると一つの空間となる町家のつくりに着目。空気の流れをイメージして棕櫚縄や裂いた布地を編みつないだパーツを立体的に構成し、細長い町家の空間を活かしたダイナミックな作品を展開しました。

作家メッセージ 岡田一郎／僕は5年前からならまちにある父の実家に住んでいます。その町家の中庭には井戸があり、深さ約5メートルにある直径約1メートル半の暗い澄んだ水面に引きつけられました。井戸について調べると、ならまちは比較的井戸が多い地域ようです。幾つかの井戸を回ると、水の流れが地下でとても重層的に流れていることが見えてきて、この地下水脈を作品のテーマにしようと思いました。

Profile

岡田 一郎(おかだ いちろう 日本)

1976年、奈良県生まれ。奈良町在住。2015年和歌山県立近代美術館、奈良町にぎわいの家などで作品を発表。見慣れた環境から新たな認識を導き出すことをテーマに、音を用いたインスタレーション作品や展示場所の場所性を取り込んだ作品、写真を用いた作品などを発表している。

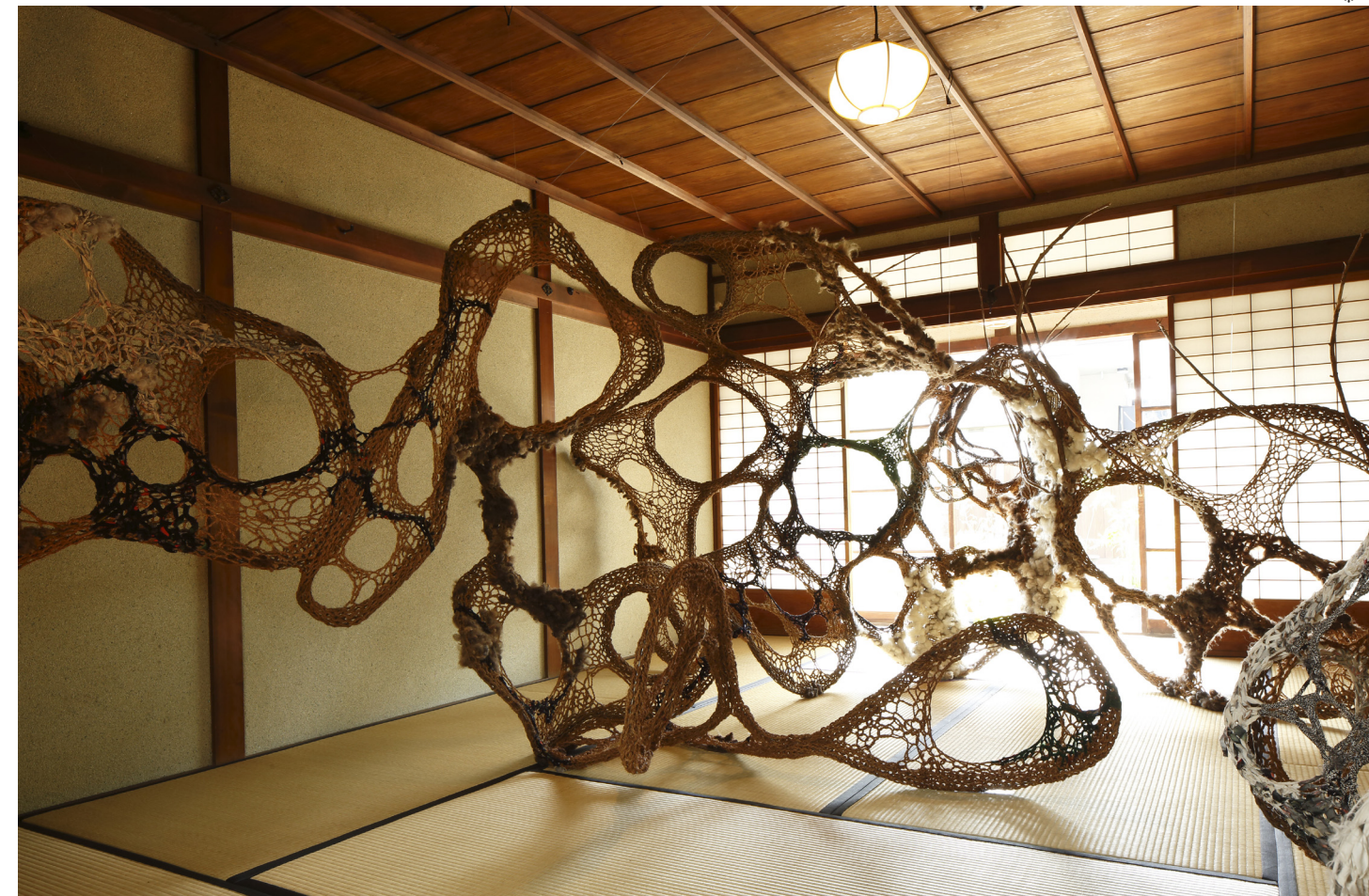


作家メッセージ 林 和音／奈良町にぎわいの家は通りに面している入り口からは想像できないような奥行きがあります。区切られた部屋のふすまや障子、扉などを開け放すことにより見える一続きの空間に着目し、空気の流れを取り入れた作品を展開しました。日本家屋の特徴的な梁や壁を改めて体感することで、その良さを感じてもらいたいと考え、導きや動き、湧き出るといったイメージで部屋ごとに作品を表現しました。また、奈良でかつて着られていたのであろう着物を提供していただき、布を裂き、自然素材と合わせて編んだものを立体構成した作品を発表しました。

Profile

林 和音(はやし かずね 日本)

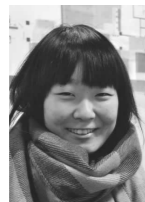
1984年、大阪府生まれ。2015年六甲ミーツ・アート・芸術散歩、2012年奈良・町家の芸術祭:HANARART(大和郡山市、浅井邸酒蔵)などのアートイベントで作品を発表。自然界の営みや情景を発想の起点とし、紐や縄、素材を編みつないで立体構成したものを空間に展開するインスタレーション作品を制作。



Profile

田中 望(たなか のぞみ 日本)

1989年、宮城県生まれ。2014年VOCA展2014(上野の森美術館)大賞受賞。アートフロントギャラリー、横浜美術館アートギャラリー、大地の芸術祭・越後妻有アートトリエンナーレ2015等に参加。その土地の民俗や歴史のリサーチと現場での体験を通して、場所の記憶や共同体のイメージを神話的な風景として描き出す。



奈良オリエント館 田中 望

かやり火の蔵

作品概要／ならまちの暮らしと深いつながりがある蚊帳と奈良晒に着目。作家は、月ヶ瀬の奈良晒保存会や老舗の蚊帳販売店、史料保存館など、麻の素材調達、流通、蚊帳の生産までの一連の工程や歴史を調査し、生産を支える人々取材しました。それは、ならまちから東部山間部、さらに東アジアへの広がりをもつ歴史と行程、人々が行きかい交流した軌跡を辿る道となりました。特産品としてまちを支えてきた奈良晒や蚊帳。生産工程とそれぞれの土地の風景を墨で描いた絵物語を浮かび上がらせた作品としました。

作家メッセージ／私は仙台出身で普段は東北地方を中心に地域取材と作品制作をしているので、奈良の人々や文化に触れ、とても刺激を受けました。これまで山形や新潟の取材で興味を持っていた幾つかのことが、歴史を紐解くと奈良ともつながっているという発見が面白いことでした。蚊帳や奈良晒は、ならまちを起点に調査をすると、周囲の農村や月ヶ瀬などの東部山間とのつながりによって成立してきたもので、さらに遡れば東アジアにまで広がる歴史を持つものでした。また、このネットワークは、かつての道にもう一度光を当てるテーマになると感じました。柳生街道を歩いたことは、美しい風景の中に聖気と、食糧や生活用具を積んで石畳の上を往き来たというかつての過酷な道のりを感じる忘れられない体験です。



*

今西家書院 紫舟

言ノ葉は、光と影を抱く



*

作品概要／今西家書院は興福寺大乘院家の坊官を務めた福智院氏の居宅で、室町時代の初期の書院造りを遺す重要文化財です。そこに、書家・紫舟は、日中韓に共通する漢字を用いた作品を展示しました。庭では、解き放たれた色鮮やかなガラス製の文字彫刻が深緑の苔の中で自然光を浴びて光り、書院には立体的な黒い鉄の文字が整然と並べられました。建築が持つ自然の陰影の美しさと呼応する光と影の表現。

作家メッセージ／私が奈良に3年間暮らしていたときに感じた「奈良は人生と対峙することから逃がしてくれない」ということを作品にしました。この経験は傷口に粗塩をすり込むような大変さでしたが、「優しさは残酷であり、そしてそれもまた優しさで、世界はそういったものでできているんだ」と教えてくれたのが奈良でした。書院には「書のキュビズム」を配しました。伝統や紙という平面から解放された書が、空間にドローイングされたように宙を舞い、360度どこからでも鑑賞できます。まだ誰も見たことがない作品を生み出したいという想いから生まれました。一方で庭には「光の書」という作品を配しました。書を同様に紙や伝統から解放して、ガラスでつくられた書に少し色のついた液体を入れ、心の景色を色に託し、太陽の光で光り輝く作品をつくりました。

Profile

紫舟(シシュー 日本)

▶38頁に掲載

